

岩 波 文 庫

31-013-11

獺祭書屋俳話・芭蕉雜談

正岡子規著



岩 波 書 店

凡例

一 本書は、正岡子規の俳句革新第一声である俳論書、瀬祭書屋主人著『瀬祭書屋俳話』と、それに続く俳論「芭蕉雜談」ばしょうぞうだんを付録として一書とし、校注者復本一郎が脚注をほどこしたものである。

一 「瀬祭書屋俳話」は、明治二十六年（一八九三）五月二十一日刊『日本叢書瀬祭書屋俳話 全』叢書瀬祭書屋俳話 全（日本新聞社発兌）を底本とし、「芭蕉雜談」は、同二十八年九月五日刊『日本叢書 祭書屋俳話』日本叢書 祭書屋俳話（日本新聞社発兌）所収の本文を底本とした。

一 読みやすさの便を考えて、適宜、振り仮名、濁点、句読点をほどこした。振り仮名は、底本の本文に倣つて歴史的仮名遣いに拠つた。なお、底本にある振り仮名には、振り仮名の下に〈原〉として区別した。

一 底本の明らかな誤記等は、訂した。例えば、「宗祇」の「祇」を「祇」、「猿簍」の「簍」を「蓑」、「咲きばるゝ」を「咲きこぼるゝ」、「せれるる」を「せらるる」と正した類たぐいである。

一 漢字はおおむね新字体に改めたが、一部、

蟬、鶯、螢^{ヤハシ}、脉、脇^{ワキ}、

等、正字体や異体字を残したものもある。

一本文中の発句(俳句)には、全体を通して句番号を付した。同一の句が複数回取り上げられていることがあるが、二回目以降の句番号には、()を付した。

一 読解上の参考となるように出典、語彙の解釈等の注記は、脚注で示した。

一 卷末には発句(俳句)の初句索引、人名索引を付載し、検出の便をはかつた。

一 各句の出典は、必ずしも初出にこだわらず、子規編纂「俳句分類」(『分類俳句全集』)、「俳家全集」等を繙くことによつて、子規が披見したと思われるテキストを示すことに努めた。例えば、丈草句103番の〈啄木鳥の枯木探すや花の中〉の句形での初出は去来編、宝永元年(一七〇四)刊『渡鳥集』であるが、あえて蝶夢編、安永三年(一七七四)刊『類題発句集』とした類である。

目 次

凡 例

獺祭書屋俳話

一一

獺祭書屋俳話小序 三

俳諧といふ名称 五

連歌と俳諧 七

延宝天和貞享の俳風 九

足利時代より元禄に至る発句

三

俳 書 四

字余りの俳句 十

俳句の前途 二〇

三

新題目	三
和歌と俳句	三
宝井其角	三
嵐雪の古調	四
服部嵐雪	四
向井去来	五
内藤丈草	五
東花坊支考	六
志多野坡	六
武士と俳句	七
女流と俳句	七
元禄の四俳女	七
加賀の千代	八
合	八

時 鳥 爺

扱はあの月がないたか時鳥

時鳥の和歌と俳句 二三

初 嵐 蒜

垂

萩
杂

女郎花 二〇

芭蕉 一〇四

『俳諧麿の栄』の評 二〇九

『発句作法指南』の評 二三一

八

芭蕉雜談

年齢 二七

平民的文学 二五

智識德行	惡句	各句批評	雄壯なる句	各種の佳句	或問	雞声馬蹄	著書	元禄時代	俳文	遺文	補文
二四	二三	二二	二一	一九	三四	三六	三三	三二	三〇	三七	三九
二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六

癩祭書屋俳話正誤

二七

解說 (復本一郎) 二七

略年譜 (復本一郎) 二三

初句索引 二九

人名索引 三〇一

獺祭書屋俳話

獺祭書屋俳話小序

老子曰く、言者は知らず、知者は言はずと。還初道人曰く、山林の樂を談ずる者、未だ必ずしも眞に山林の趣を得ずと。政治を談ずる者、政治を知らず。宗教を談ずる者、宗教を知らず。英仏の法を説き、独露の学を講ずる者、未だ必ずしも英仏独露を知らず。文学の書を著し、哲理の説を為すもの、未だ必ずしも文学哲理を知らず。知らざるを知らずとせず、而して之を口にし、之を筆にし、以て天下に公にする。知者は之を見て、其謬妄^{そのびうばう}を笑ひ、不知者は之を聞きて、其博識に服す。故に之を談ずる者愈^{いよいよ}多くして、

三 哲學理論。

一『老子』下篇「知者不言」章第
五十六^{（ごじゅうろく）}に「知者不^レ言。言者
不知」とある。
二中国明代の還初道人（洪応明
（こうおうめい）、字（なま）は自誠（じせい）の著作
『菜根譚』に「談^二山林之樂者、
未^二必真得^二山林之趣」とある。

之を知る者愈少し。余も亦俳諧を知らず。而して妄りに俳諧を談ずるものなり。曩に『日本』に載する所の俳諧、積んで三十余篇に至る。今之を輯めて一卷と為さんとす。乃ち前後錯綜せる者を転置して、稍々俳諧史、俳諧論、俳人俳句、俳書批評の順序を為すといへども、固と隨筆的の著作、条理貫通せざること多し。況んや浅学寡聞にして未だ先輩の教を乞ふに遑あらざれば、誤解謬見亦心に少からざるべし。知者若し之を読まば郢正の労を賜へ。若し夫れ俳諧を知らざる者に至りては、知らずして妄りに説を為す者の言に惑ふ莫れ。

明治廿五年十月廿四日

六 獺祭書屋主人 識

一 明治二三年(一八九〇)二月一日 創刊の新聞。通称「日本新聞」。夏目漱石著「吾輩は猫である」に越智東風の言葉として「私も仕方がないから、懐から日本新聞を出して読み出しました」と。社長は陸羯南(つがな)。反政府的立場を堅持。

二 明治二五年(一八九二)六月二六日より一〇月二〇日まで三八回にわたって「獺祭書屋俳諧」を連載。

三 「郢斬(けいせん)」に同じ。正すこと。批正。

四 子規自身。謙辞。

五 一八九二年。

六 子規の雅号の一つ。「だつさいしよをくしゆじん」。「我的書齋、書籍縦横に乱れて、踏むに處無し。因つて此号あり」(子規稿「雅号に就きて」)。他に獺祭漁夫、獺祭魚夫とも。

俳諧といふ名称

俳諧といふ語は、その其道に入りたるもの、平生言ふ意義と、一般の世人が学問的に解釈する意義と、相異なるが如し。俳諧といふ語の始めて日本の書に見えたるは、

『古今集』^七中に俳諧歌とあるものこれなり。俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釈する人多く、其意味に因りて俳諧連歌、俳諧発句と云ふ名称を生じ、俗に又之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尚なる者ありて、必ずしも滑稽の意を含まず。ここに於て俳諧な

七 『古今和歌集』での表記は「諂諧歌」。惠空編『節用集大全』(延宝八年(1680)刊)に「諂諧(かばい) 連歌ノ戯言也」と。

る語は、上代と異なりたる通俗の言語又は文法を用ひしものを指して云ふの意義と変じたるが如し。然れども普通に俳諧社会の人が単に俳諧とのみ称する時は、俳諧連歌の意にて云ふものなり。而してこれと区別して十七字の句を発句といふが通例なれども、「俳諧を学ぶ」とか又は「俳諧に遊ぶ」とか云ふが如き場合には、必ずしも俳諧と発句とを区別せずして、両者を包含する程の広漠なる意に用ふる事も少からず。斯くて終に局外の人をして往々迷まよひを生ぜしむることあり(余は世上の俳諧仲間に交はりしことなれば、場処によりて其意義に相違あるや否や詳しきことは知らず)。

因に云ふ。芭蕉又は其門弟等が俳諧は滑稽なりと称す
る、其滑稽といふ語は、余が前に述べたる滑稽即ち通

常世人が用ふる滑稽に非ず。^{あら}只和歌の单一淡泊なるに對して、其雅俗の言語混淆し、^{こんかう}其思想の変化多くして、且つ急劇なるを謂ふのみ。

連歌と俳諧

俳諧の連歌より出で、連歌の和歌より出でたるは人の知る所なり。其始めは一首の歌の上半下半を一、二の人して詠みたる程のものなりしが、後には歌の上半即ち十七文字だけを離して完全の意味をなすに至れり。されど足利時代に在りては、猶其趣和歌の上の句の如くにして、上代の言語を以て上代の思想を叙するに止まれば、其文学として讀者を感じしむるの度は、在來の和歌に比して却て之に劣るものといふべし。且つ此時代の發句は、

ニ 子規著『俳諧大要』(明治二八年二八九号)稿、同三二年一月刊)は「俳句は文学の一部なり。文学は美術の一部なり。故に文学の標準は文学の標準なり。文学の標準は俳句の標準なり」と。

所謂連歌の第一句にして、敢てそれ許りを独立せしめて

一文学となす訳にあらねば、其力を用ふる事も随つて専
一ならず。之を読めば多少の倦厭けんえんを生ぜしむるの傾きあ

り。松永貞徳、徳川氏の初めに出でゝ、連歌に代ふるに

俳諧を以てせしより、発句にも重みの加はりしか共、其

発句は地口、しやれ、謎等の滑稽に過ぎざれば、文学上

の価値に至りては、足利時代に比して更に一層の下落を

來きたしたりといふも、酷評には非ざるべし。貞徳派千篇一

律にして、竟に新規なる思想も出でざりしかば、宗因等

起つて檀林の一流を創め、一時は天下を風靡せしが、こ

れ亦稍々發達したる滑稽頓智に外ならざるを以て、忽ち

芭蕉派の圧倒する所となりて、今日に至る迄猶有るか無

きかの有様なり。^四芭蕉は趣向を頓智滑稽の外に求め、言

一 元龜二年(天正)一承応二年(文永三)。貞門俳諧の指導者。「俳言」の有無によつて連歌と俳諧を峻別。編著に「俳諧御傘」(慶安四年(文五)刊)など。

二 慶長一〇年(文元)一天和二年(文六)。西山氏。一幽・梅翁。談林(檀林)俳諧の指導者。「戯言」としての俳諧を主張。門下に西鶴、惟中、高政等。

三 蕉門。芭蕉を中心とする俳諧集団。其角、嵐雪、去来、丈草、支考、野坡等。

四 正保元年(文四)一元禄七年(文五)。「風雅のまこと」に基づく「不易」「流行」の俳諧を実践。

語を古雅と卑俗との中間に取り、「万葉集」以後新に一

五 奈良時代未成立の現存最古
の和歌集。

面目を開き、日本の韻文を一変して時勢の変遷に適応せしめしを以て、正風俳諧の勢力は明治の世になりても猶依然として隆盛を致せるものなるべし。而して芭蕉は発

六 ここでは「蕉風俳諧」のこと。芭蕉が開拓した「滑稽頓智」を超えた俳諧。

句のみならず、俳諧連歌にも一様に力を尽し、其門弟の如きも猶其遺訓を守りしが、後世に至りては単に十七文字の発句を重んじ、俳諧連歌は僅に其付属物として存するの傾向あるが如し。

延宝天和貞享の俳風

足利時代の連歌より、芭蕉派の俳諧に遷るに、貞徳派、檀林流等の階梯を経過したる事は前に述べたるが如し。然れども猶細かに之を観れば、其間無数の階梯と漸次の